

第9回 社会的イノベーターとしての渋沢栄一



逆境の時こそ、力を尽くす

150年前の日本は発展途上国でした。数十年という短期間で日本はいかにして当時の先進国と肩を並べることができたのでしょうか。それは、日本が鎖国下の封建制度から抜け出し、次々と社会的イノベーションを創出したからです。

例えば、「銀行」というイノベーションがありました。銀行という業種のネーミングも造語です。銀行は、日本が新時代を切り拓くために必要な資金を、社会の隅々へ循環させることに寄与しました。まさに、社会的課題の解決を起業意図としたインパクト・スタートアップだったのです。

この時代には数多くの会社が創立され、その多くが誰もが知っている会社として今も残っています。多種多様な業種ではありましたが、激動の時代に

生まれ、社会的イノベーションを促すスタートアップであったという共通点がありました。

会社が社会において存在意義を示すことは、どの時代でも大事なことです。ただ、一社だけが声を上げて世論にはなりません。新しい時代を導く民間の世論形成のために、東京商法会議所（東京商工会議所の前身）が設立されました。当時の日本において斬新的な社会的イノベーションでありました。

当時、発展途上国であった日本の豊富な資源は、端的に言えば水と森、そして人だけでした。日本は、人的資本の向上により社会的イノベーションを創出し、先進国への道を歩み始めたのです。渋沢栄一は「日本資本主義の父」と言われますが、本質は社会的イノベーターでありました。

新しい時代を切り拓く社会的イノベーターには、必ず逆境の場面があります。その多くは自然的な逆境ではなく、人、組織、社会の間で起こる人為的な逆境です。渋沢は、そのような人為的な逆境では心構えが重要であると示してくれました。

「自分からこうしたい、ああしたいと奮励さえすれば、大概はその意のごとくになるものである。しかるに多くの人は自ら幸福なる運命を招こうとはせず、却って手前の方からほとんど故意に俵けた人となって、逆境を招くようなことをしてしまう。それでは順境に立ちたい、幸福な生活を送りたいとて、それを得られる筈がないではないか。」

（【論語と算盤】大丈夫の試金石）

渋沢の「こうしたい・ああしたい」とは、日本の新しい時代を見たいという揺る

がない意志でした。これは、現在の日本国民全体にも通じるメッセージではないでしょうか。大事なポイントは「自分ができるか・できないか」ではなく、「こうしたい・ああしたい」です。

ビジネスが存在する理由は、もちろん利益を求めることです。しかしながら、明治時代の曙に数多くのビジネスが設立されたのは、利潤追求だけではありませんでした。渋沢を含む、当時の大勢の日本人は新しい時代を見なかったのです。

現在の我々はビジネスを通じてどのような新しい時代を見たいのか。これから多くの企業の150周年ラッシュが始まる本年だからこそ、再び「こうしたい・ああしたい」を呼び起こすべきではありませんか。